

第六章 動詞

動詞

物事の移動し變化する屬性を表す用言を動詞と云ひます、言葉を換へて申しますれば、物事の流動的屬性を表す用言を動詞と云ひます。流動的屬性を表す中で最も多いのは動作を示すものになります。動作の中には有意と無意との別がありまして、犬走る、鳥が飛ぶと云ふ文の走る、飛ぶは有意の動作を示すのでありますし、花散る、葉が落ちると云ふ文の散る、落ちるは無意の動作を示すのであります。即ち走る、飛ぶは犬又は鳥が自己の意志からする所の動作でありますが、散る、落ちるは花や葉が散らうともせず、落ちようともしないで自然に起る動作であります。斯う云ふ有意無意の動作を示すのが動詞の中には一番多いのであります、又時としては流動的狀態に單に狀態と申しますと形容詞の狀態を云ふものと紛れますからかう云ふのであります、を示すものがあります。影見ゆ、音が聞えると云ふ文の見ゆ、聞えるは其の例であります。夫から山聳ゆ、子が母に似る、の聳ゆ、似るは固定的狀態を示して居りまして、動詞の定義には合はぬやうであり

ますが、此等は論理的に申しませうならば、「山聳々たり」「子が母に似て居る」などと、辭又は之に準ずべきものを伴つて云ふべきでありますのを、かくの如く流動的に表して固定的の状態を表すことになつたので、一つの變體と見るべきものであります。

✓併し乍ら動詞の中には、實際に流動的觀念を表さぬものがあります。それはどんなものかと申しますと云ふと、「あり」あると云ふ語であります。「あり」あるの外に「居り」居る「侍り」と云ふのもありますが、「居り」の語原は「ゐあり(居有)」「侍り」の語原は「はひあり(這有)だ」と云ひますから、今は假に「あり」あるの一語を擧げたのでありますが、此の「あり」あるは實際に流動的觀念を表さないで、存在的觀念を表すのであります。それでですから、古來用言を二つに分けることには一致して居りますが、「あり」の所屬に就きましては、人に依つて區々であります。近頃の或學者などは「存在」と云ふ別の品詞を立て、動詞から「あり」あるを離し、形容詞から「なし」ないを離して、之に屬させて居ります。併し單語の分類と云ふものは、唯其の意味にばかり偏してはなりません。同時に形態・職能をも考へなければなりません。「あり」ある

「なし」ないは如何にも其の意味から申しませうならば、動詞でも形容詞でもなく、他の同類の語であります。が形態・職能の上から申しますれば、あるは他の動詞と略・趣を同じくし「なし」ないは形容詞と全く同様でありますから、此の二語の爲に特別の品詞を立てることをしないで、一は動詞に入れ、一は形容詞に入れる取扱は、甚だ當を得たものであらうと思ふのであります。又他の學者は動詞を爲相（なるけ）然相（なるけ）の二つに分け、ありあるを後の然相と云ふ目に入れて居ります。之は理論上少しも非難すべきことはありませんが、小は大に従ひ、少數は多數に壓せられる世の中に、僅か一語の爲に仰々しく目を立てることは如何と思はれます。に依つて、之にも賛成しかねて居ります。要するに私は動詞は流動的觀念を表すのが本體であるけれども、便宜上存在（ある）的觀念を表す「あり」あるをも之に加へると云ふことにして置きたいと思ふのであります。

第一節 活用の種類

活用の種類

動詞は其の語尾を變化いたします。例へば「死ぬ」と云ふ動詞は文語では

いまだ死なず。既に死にたり。將に死ぬべし。死ぬる者多し。
死ぬれば惜しまる。潔く死ね。

の如く「死な」「死に」「死ぬ」「死ぬる」「死ぬれ」「死ね」の六つの形に變化し、口語では
まだ死なぬ。もう死にました。間もなく死ぬだらう。潔く死ね。
の如く「死な」「死に」「死ぬ」「死ね」の四つの形に變化する類であります。かくの如
く語尾を變化致しますのを活用と云ひます。

動詞を活用によつて彙類致しますと云ふと、文語は九種、口語は五種にな
ります。之から其の各種類を對照し乍らお話ししようと思ひますが、其の前
に先づ定めて置きたいと思ふことがあります。それは各種類の動詞の活
用形を排列する模倣であります。活用形を排列するには、大體に於きまし
ては五十音圖を基礎に立てるのであります。動詞の種類に依りまして、活
用形の数が違ひますから、其の外にも定めて置きたいところがあるのであり
ます。例へば「死ぬ」と云ふ動詞は今も申し上げました通、文語では六つ、口語
では四つの活用形を有つて居りますが、着る」と云ふ動詞は
袷をきず。單衣をきる。袷をきれば暑し。

のやうに文語でも三つ、

裕をきない。」「單衣をきる。」「裕をきれば暑い。

のやうに口語でも三つの活用形しか有つて居りませぬ。然るに動詞の用法と云ふものは種類に依つて始んど變りはありません。随つて活用形の多少に依つても變りはありませんからして、他の種類の動詞が一つの活用形で済ませて居る所を他の種類の動詞は二つ又は三つの活用形で表し、其の反對に他の種類の動詞が二つ又は三つの活用形で表して居る所を、或種類の動詞は一つの活用形で表して居ると云ふことがなくてはならぬ。現にさうして居るのであります。即ち前の「死ぬ」着るの例で申しますると云ふと、「死ぬ」が「死なず」「死にたし」「死ぬ」又は「死なぬ」「死にたい」「死ぬ」と三つの場合に三つの形を要するのに「着るはきず」「きたし」「きよ」又は「きない」「きたい」「きろ」と三つの場合に一つの形しか要しないのであります。それでありますから、次の節に於きまして動詞の用法をお話する時の便宜上、活用形を最も多く有つて居る一種類を取つて、他の種類の活用形を其の數に揃へる必要があるのであります。

ます。

甲 四段活用・良行變格 活用及び奈

行變格活用

四段活用

今「讀む」と云ふ動詞を取つて、前に述べた手續で活用形を調べて見ますと、文語でも「讀まず」「讀みたし」「讀むなり」「讀めども」「讀め、口語でも「讀まぬ」「讀みたい」「讀む讀むのだ」「讀めば」「讀め」の如くマ行の「ま」から「め」までの四段に活用することが知れます。斯の如く五十音圖の第一音から第四音までの四段に活用するものを四段活用又は四段と云ひます。

良行變格活用

次に「あり」と云ふ文語の動詞を取つて活用を調べて見ますと、「あらず」「ありたし」「ありあるなり」「あれども」「あれ」の如く、ラ行の「ら」から「れ」までの四段に活用致しまして、前の四段活用に似て居りますが、四段活用では第三段を第三活用形即ち言ひ切りとするのを、これは第二段を第三活用形即ち言ひ切りにもして居ることが知れます。かくの如きものを良行變格活用又は良變と云ひます。

足利ノ末頃ヨリ
ナリ。
徳川時代ニテハ

四段トナリツ、
四段トナリツ、

良變に屬しまする詞は「あり」の外には「居り」「侍り」の二つあります。併し「居り」は「ひあり（居有）」「はべり」は「ひあり（這有）」の約つたのだと云ふ古來の説でありますから、結局「あり」の一語に歸するのであります。

「居り」は良變の動詞でありますから、第三活用形を「居り」と申すのであります。既に足利時代の末頃には四段活用にも轉じて用ゐられて居たと見えます。まして、其の頃の漢籍の訓點には多く「居れり」となつて居ります。殊に徳川時代になりましては、漢籍は勿論、普通の隨筆小説等に殆んど「居り」と云ひ切つたものはありません。今日でも矢張同様で、其の功多きに「居る」などと云つて居るのであります。それで文部省は嘗て普通文法を整理する爲に「文法上許容すべき事項」と云ふものを告示しました。其の中に、此の動詞を四段活用として用ゐることを許容して居るのであります。

良變は文語特有の活用でありまして、口語では全く四段活用に轉じて居ります。即ち文語で「あり」「居り」と第二段を第三活用形とするのを、「ある」「居る」と第三段を第三活用形として居るのであります。

次に「去ぬ」といふ文語の動詞を取つて調べて見まするに、「去こなす」「去こにたし」

「去ぬ」「去ぬるなり」「去ぬれども」「去ぬの如く」第一・第二・第三及び第六活用形は四段活用 of ナ行と同様でありますけれども、第四・第五活用形が「ぬ」に「る」又は「れ」が附いて居ります。斯の如きものを奈行變格活用又は奈變と云ひます。此の活用に屬する語は「去ぬ」の外に尙「死ぬ」と云ふのがあります。尤も「死ぬ」と云ふ動詞は「息去ぬ」の約つたのだと云ひますから、結局は「去ぬ」の一語に歸するのであります。「死ぬ」が「息去ぬ」の約だと云ふ説の眞實であらうと云ふのは、「去ぬ」の「い」が省かつたと云ふ助動詞の「ぬ」が、其の語原たる「去ぬ」に連なつて「去にぬ」と云はぬと同時に、「死ぬ」に連なつて「死にぬ」とも云はぬのでも知れるのであります。

奈變は文語特有の活用でありまして、口語では「死なぬ」「死にたい」「死ぬ」「死ぬのだ」「死ねば」「死ねの如く」活用致します。即ち文語の第四活用形の「ぬる」「が」「ぬ」になり、第五活用形の「ぬれ」「が」「ぬ」になつて、全く四段に轉じて居るのであります。尤も中國・四國・九州等には間々「ぬる」「ぬれ」の二つ又は一つの形を存して居ります。

總括・活用表

た通であります。文語の四段活用動詞はカ行・ガ行・サ行・タ行・ハ行・バ行・マ行及びラ行の八行にあります。古くはダ行にも「ひづ」「そほづ」「もみづ」等と云ふ動詞がありました。後には皆上二段活用に轉じました。口語の四段の動詞は之に奈變から轉じたものを加へて九行にあります。從來は活用の行を説くに方りまして、別に濁音の行を加へないで、清音の行を以て代表させて居ました。けれども清音の行に活用する動詞があれば濁音の行は活用する動詞があるかと申しますれば、さうはまゐりませんで次の表でも御覧の通サ行にはあるが、ザ行にはないと云ふこともあるのでありますから活用の行を説く以上は必ず濁音の考に入れなければならぬのであります。次にこれまで述べた三種の動詞の活用表を出します。表には各行一語づつ挙げましたが、口語に二語以上挙げたのがありますのは、其の一つ又は二つが文語では他の活用に屬するものであるのであります。

又ハ 佐 多 ぬ ま 辰

類種	行	四 段										變良	變奈
		ナ	タ	サ	ガ	カ	ハ	バ	マ	ラ	ナ	ラ	ナ
文	語 幹	か(書)	お(押)	う(打)	あ(逢)	と(飛)	よ(讀)	つ(釣)	あ(有)	し(死)	ナ	ラ	ナ
	第一活用形	か	が	た	は	ば	ま	ら	ら	な	ナ	ラ	ナ
	第二活用形	き	し	ち	ひ	び	み	り	り	に	ナ	ラ	ナ
	第三活用形	く	ぐ	つ	ふ	ぶ	む	る	る	ぬ	ナ	ラ	ナ
	第四活用形	く	ぐ	つ	ふ	ぶ	む	る	る	ぬ	ナ	ラ	ナ
	第五活用形	け	げ	て	へ	べ	め	れ	れ	ね	ナ	ラ	ナ
口	語 幹	か(書)	お(押)	う(打)	あ(逢)	と(飛)	よ(讀)	つ(釣)	あ(有)	し(死)	ナ	ラ	ナ
	第一活用形	か	が	た	は	ば	ま	ら	ら	な	ナ	ラ	ナ
	第二活用形	き	し	ち	ひ	び	み	り	り	に	ナ	ラ	ナ
	第三活用形	く	ぐ	つ	ふ	ぶ	む	る	る	ぬ	ナ	ラ	ナ
	第四活用形	く	ぐ	つ	ふ	ぶ	む	る	る	ぬ	ナ	ラ	ナ
	第五活用形	け	げ	て	へ	べ	め	れ	れ	ね	ナ	ラ	ナ

乙 上一段活用及び上二段活用

上一段活用

今試みに「着る」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますと、文語でも「さす」「さたし」「さるなり」「されども」「さよ」、口語でも「さない」「さたし」「さる」「さるのだ」「されば」

Kakeri +
 3: hi } + miru
 mato

Kakeri + miru

Kakeri + miru
 Kakeri + miru

Kakeri + miru > Kakeri

Kakeri + miru > Kakeri + miru

Kakeri + miru
 yume + miru

「き」のやうに、カ行の「き」の一段に活用し、更に其の「き」に「れ」が添つて活用する事が知れます。かくの如く五十音圖の第二音の一段に活用し、其の第二音に「れ」が添つて活用するのを上、一段活用又は上一段と云ひます。

文語の上一段に屬する動詞は甚だ少數でありまして、ア行では「射る」、「鑄る」、「沃る」、カ行では「着る」、ナ行では「似る」、「煮る」、ハ行では「乾る」、「噫る」、マ行では「見る」、ワ行では「以る」、「居る」、「緩る」等、全體で十餘りあるばかりであります。さうして此等は語幹が其の儘活用形又は其の一部になつて、「れ」を取り去りますれば皆一音であることとは注意すべき事柄であります。尤も此の外に二音以上のももありますが、多くは他の語と「見る」又は「居る」、「以る」と熟合したものであります。即ち他の語と「見る」と熟合したものは、「こゝろみる」、「試みる」、「後見る」、「かゝみる」、「かんがみる」、「かへりみる」、「顧みめる」、「夢など」、「こゝろみる」、「うしろみる」の如きは古くから上二段に轉じて用ゐて居ます。次に他の語と「ゐる」と熟合したものは、「つぎゐる」、「急居る」、「ちゐる」、「心安まる」、「とゐる」、「國樂など」であります。「まゐる」は今日では「まゐる」と體言にしか用ゐませんが、古くは動詞としても用ゐられて居たのであります。次に「以る」

と複合したものは「ひきゐる(率)」「もちゐる(用)」などであります。「もちゐる」と云ふ語の活用は古來多くの學者が論争を盡したもので、一つの語で此ほど問題になつたのは恐らくあるまいと思ひます。併し其のワ行上一段であることは、古記録に徴して明白な事實でありますが、法令の文には歴史的にハ行上二段に用ゐて居ります。随つて又國定讀本にも之に従つて居るのであります。」

口語では上一段の動詞の複合せぬもの、即ち一音のものの中、「射る」「鑄る」などを四段活用のやうに用ゐて居る地方があります。併し他の地方は矢張上一段に用ゐて居りますし、それに四段に用ゐて居る所でも「射落す」「鑄直す」の如く他の用言に連ねる場合には矢張原の形を用ゐて居るのですから、まだ十分に轉じ切らないものとして、之を上一段に收めたいと思ふのであります。國定讀本にもさうしてあります。

これは上一段から四段に轉ぜんとして居る動詞に就いての話ですが、富山・石川・福井・滋賀・三重の東境を境として、其の東では「飽く」「借りる」「足る」などと云つて、上一段に用ゐて居ります。併し之を四段に用ゐる

hiki + wimu
mochi + wimu

る事は西國一圓さうでありますし、文學の上にも土臺を有つて居るのですから、必ずしも矯正するにも及ばぬと考へます』

▽次に文語の「起く」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますに、「起きず」「起きたし」「起く」「起くるなり」「起くれども」「起きよ」の如く、カ行の「き」「く」の二段に活用し、更に其の「く」に「る」が添つて活用することが知れます。かくの如く五十音圖の第二音第三音の二段に活用し、其の第三音に更に「る」が添つて活用するものを上二段活用又は上二段と云ひます。

上二段に屬する動詞の中で「懷む」と云ふのは今日の普通文に屢々四段活用として用ゐます。それで「文法上許容すべき事項」には之を許容して居ります。

上二段は文語特有の活用でありまして、口語では「起きない」「起きたい」「起きる」「起さるのだ」「起されば」「起さる」の如く活用します。即ち文語で第三音及び之に「る」の添つて活用する所を、第二音及び其の第二音に「る」が添つて活用して、全く上一段に轉じて居るのであります。併し地方に依りましては間々上二段の活用形を混じて居る所があります。それは殊に九州に多い

總括・活用表

やうであります。

文語の上一段及び上二段が口語で上一段のみに歸することは以上申述べた通りであります。文語の上一段の動詞は「行ナ、行ハ、行マ、行ヤ、行及ビ、行の六行、上二段の動詞は「行ガ、行タ、行ハ、行マ、行ヤ、行及ビ、行の九行にあります。口語の上一段の動詞は之に文語の他の種類から來たサ行ザ行が加つて、ア行を除く他の十三行にあります。即ち左表の通りであります。

		上		一		類種	
		ナ		ダ		行	
		(似)				(着)	
		に				き	
		に				き	
		にる				きる	
		にる				きる	
		にれ				きれ	
		に				き	
		(似)		と(閉)		お(着)	
		に		ぢ		き	
		に		ぢ		き	
		にる		ぢる		きる	
		にる		ぢる		きる	
		にれ		ぢれ		きれ	
		に		ぢ		き	
		お(落)		あん(案)		さ(察)	
		ぢ		じ		し	
		ぢ		じ		し	
		ぢる		じる		しる	
		ぢる		じる		しる	
		ぢれ		じれ		しれ	
		ぢ		じ		し	
		す(過)		お(起)		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		きれ		きれ		きれ	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	
		き		き		き	

丙 下一段活用及び下二段活用

今試みに文語の「蹴る」と云ふ動詞の活用形を調べまするに「けず」「けたし」「け

段 二 上								段					
ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	カ	リ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ
お （下）	む （報）	う （恨）	ざ （錯）	し （強）	と （閉）	お （落）	す （過）	（居）		（射）	（見）		（乾）
り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	る		い	み		ひ
り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	る		い	み		ひ
る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	る		いる	みる		ひる
るる	ゆる	むる	ぶる	ふる	づる	つる	ぐる	る		いる	みる		ひる
るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	づれ	つれ	ぐれ	るれ		いれ	みれ		ひれ
り	い	む	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	る		い	み		ひ
								（居）	お （下）	む （報）	（見）	ぎ （錯）	し （強）
								る	り	い	み	ひ	ひ
								る	り	い	み	ひ	ひ
								るる	りる	いる	みる	ひる	ひる
								るる	りる	いる	みる	ひる	ひる
								るれ	りれ	いれ	みれ	ひれ	ひれ
								る	り	い	み	ひ	ひ

る「けるなり」「けれども」「けよの如く、カ行の「け」の一段に活用し、更に「け」に「れ」が添つて活用することが知れます。✓又口語の「受ける」と云ふ動詞の活用形を調べて見まするに、「受けない」「受けない」「受ける」「受けるのだ」「受ければ」「受けるの」如く、これも同様に活用することが知れます。斯の如く五十音圖の第四音の一段に活用し、更に第四音に「れ」が添つて活用致しまするものを下一段活用又は下一段と云ひます。

下一段の動詞は文語では「蹴る」と云ふ一つの語がある丈であります。口語では之を「けらない」「けうたい」「ける」「けるのだ」「ければ」「れの如く四段に活用致します。尤も用言に連ねる場合には「けたふす」「飛ばす」などの如く尙本來の形を用ゐますから、全く四段活用に轉じたのでありませぬ。

下二段活用

次に文語の「受く」と云ふ動詞の活用形を調べて見まするに、「受けず」「受けたし」「受く」「受くるなり」「受くれども」「受けよの如くカ行の「け」に活用し、更に「く」に「る」「れ」が添つて活用することが知れます。かくの如く五十音圖の第四音、第三音の二段に活用し、更に第三音に「れ」が添つて活用するのを下二段活用又は下二段と云ひます。

總括活用表

下二段は文語特有の形でありまして、口語では第三音及び之に「る」「れ」の添つたものが第四音に「る」「れ」の添つたものになつて、全く下一段に轉じて居ります。尤も和歌山縣の日高郡及び九州の殆んど全部には尙第三音に「る」「れ」の添つた形を存して居ます。

文語の下一段の動詞はカ行ばかりにありまして、下二段の動詞は、ア行・カ行・ガ行・サ行・ザ行・タ行・ダ行・ナ行・ハ行・バ行・マ行・ヤ行・ラ行及びワ行の總べての行にあります。口語の下一段も同様であります。

文語の下二段の動詞の中でハ行・ヤ行・ワ行に屬するものは第一活用形に於て互に假名が紛れるのみならず、ハ行・ワ行は第二活用形以下に於てこれをヤ行に移して發音することが多うございます。例へば「代ふ」「堪ふ」の如きハ行の動詞「植う」「据う」の如きワ行の動詞を「代ゆ」「代ゆる」「堪ゆ」「堪ゆる」「堪ゆれ」「植ゆ」「植ゆる」「植ゆれ」「据ゆ」「据ゆる」「据ゆれ」の如きヤ行に移して發音し、又之を發音の儘に書くことが往々あります。注意しなければなりません。斯く相混ずる三行の動詞の中で、ワ行に屬しますものは「植う」「饑う」「据う」の三語ばかりでありますから、記憶するにも容易であります。ハ行に屬します

るものは、其の数が極めて多く、ヤ行に屬するものも三十ばかりありますから、之を記憶するのは面倒であります。此の二行を大體に於て分ちまするには、「何を何する」と云へるか、「何が何うする」と云へるかを試みるのであります。さうして「何を何する」と云へるものはハ行、「何がどうする」と云へるものはヤ行と定めるのであります。例へば「代ふ」は「水を代ふる」。「痛さを堪ふる」と云へますからハ行で「肥ゆ」「絶ゆ」は「馬が肥ゆる」「糸が絶ゆる」と云へますから、ヤ行とかう定める類であります。併し多少の例外がありますから、其の積りて居なければなりません。

下						種類	
タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	行	
				(蹴)		語幹	文
				け		第一活用形	
				け		第二活用形	
				ける		第三活用形	
				ける		第四活用形	
				けれ		第五活用形	
				け		第六活用形	
す(捨)	ま(交)	まか(任)	さ(下)	う(受)	(得)	語幹	口
て	せ	せ	げ	け	え	第一活用形	
て	せ	せ	げ	け	え	第二活用形	
てる	せる	せる	げる	ける	える	第三活用形	
てる	せる	せる	げる	ける	える	第四活用形	
てれ	せれ	せれ	げれ	けれ	えれ	第五活用形	
て	せ	せ	げ	け	え	第六活用形	

二 下										段 一								
マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ
ほ （譽）	くら （比）	た （堪）	か （兼）	ぬ （撫）	す （捨）	ま （交）	ま （任）	さ （下）	さ （受）	（得）								
め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え								
め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え								
む	ふ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う								
むる	ふる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる								
むれ	ふれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ								
め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え								
											う （植）	か （枯）	き （消）	ほ （譽）	へら （比）	た （堪）	か （兼）	な （撫）
											ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
											ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
											ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
											ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
											ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ
											ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で

段		
ワ	ラ	ヤ
う (植)	か (枯)	き (消)
ゑ	れ	え
ゑ	れ	え
り	る	ゆ
うる	るる	ゆる
うれ	るれ	ゆれ
ゑ	れ	え

加行變格活用

丁 加行變格活用

今又試みに文語の「來」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますと、「こず」「きたし」「くるなり」「くれども」「こよの如く」「こ」「き」「く」「くる」「くれ」と活用し、口語の「來」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますと、「こない」「きたい」「くる」「くるのだ」「くれば」「こい」の如く、「こ」「き」「くる」「くれ」と活用することが知れます。これを文語又は口語の加行變格活用又は加變と云ひます。文語の加變と口語の加變との違ふ所は文語で第三活用形を「く」と云ふ所を、口語では「くる」と云つて、第四活用形と同じになつて居る點にあるのであります。

文語又は口語の加變の動詞は唯「來」又は「來る」の一語ばかりであります。文語の「來」は今日の普通文には餘り用ゐませぬ。其の代に「來^{キタ}ると云ふ四段の動詞を用ゐます。「來る」は「來」の第二活用形の「き」に「たり」と云ふ良變に活用

活用表

種類	文						口									
行	語						語									
變加	力	(來)	こ	き	く	くる	くれ	こ	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ	
			第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第五活用形	第六活用形			第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第五活用形	第六活用形

する助動詞の附いたものでありますが、古くから四段に轉じ、「たり」の意味を失つてしまひまして、更に「たり」を連ねて「來りたり」などとも用ゐられて居るのであります。口語の「來る」は全國の大部加變に活用して居るのであります。すが、或地方には之を上一段に活用して居る所もあります。

戊 佐行變格活用

左行變格活用

文語の「す」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますと、「せす」「したす」「すする」なり「すれども」「せよ」の如く「せ」「し」「す」する「すれ」と活用し、口語の「する」と云ふ動詞の活用形を調べて見ますと、「せぬ」「しない」「したい」「する」「するのだ」「すれば」「せよ」の如く「せ」「し」「する」「すれ」と活用することが知れます。これを文語又は口語の佐行變格活用又は佐變と云ひます。文語の加變と口語の加變との違

$\text{cho masu} \rightarrow \text{cha shi masu} \rightarrow \text{chasu}$
 $\text{masu} \rightarrow \text{emashimasu} \rightarrow \text{emasu}$

「おはす」の活用

ふ所は、文語で第一活用形及び第六活用形を「せ」と云ふのを、口語で「せ又はし」と云ひ、文語で第三活用形を「す」と云ふのを、口語で「する」と云つて、第四活用形と同じになつて居る點にあるのであります。

文語又は口語の佐變の動詞は「す又はする」と云ふ一語があるばかりであります。

✓普通の文典には文語の佐變の動詞に尙「おはす」と云ふのを挙げますが、私は「おはす」は佐變ではないと云ふことを信じて居ります。元來「おはす」と云ふ語は「大坐坐」と云ふ語の約つたのでありまして、それが「おはします又はおまします」になり、更に「おはす」となつたのであります。今日京都邊で用ゐる所の「おますはおまします又はおはす」の轉じたものでございます。さうして「おはす」の語原の「おほまします及び夫から轉じたおはします又はおまします」が四段であります如く、「おはす」も四段であつたのであります。處が中古下二段活用の勢力を逞しうしました時、同時に又下二段にも活用することになつたのであります。夫を四段に活用するものの第二活用形の「し」と下二段に活用するものの第二活用形の「せ」とかへて、「おはす」は四段及び佐

變に活用するなどと云ふやうになつたものと思はれます。即ち

四 段 さ し す せ せ

下二段 せ せ す する すれ せ

若しこれが佐變であるならば、一動詞にして兩様に活用して居るものは其の組合せて尙他に活用すると云はなければならぬことになるのであるです。

✓却説「おはす」と云ふ動詞が佐變でない致しますれば、佐變の動詞は「又はする」の一語と云ふことになりませんが、元來「す」又は「する」と云ふ動詞は、其の意義が極めて茫漠たるものでありますからして、或實質的意義を表す爲には、其の意義を有する他の詞と熟合させて用ゐることが頗る多いのであります。此の場合に於きましては「す」又は「する」は唯他の語を動詞とする爲に役立つことにはなるのであります。今文語に就いて其の他の語と熟合した場合を分類して見ますと大凡次の六つになります。

1. 名詞と熟合したもの、「枕す」「位す」「冠す」「罪す」等。

2. 漢語と熟合したもの、「發す」「着す」「勉強す」「運動す」等。「す」が他の語と熟合

文語「す」の他の語と熟合する場合

omomi-su > omomen
iyashimi-su > iyashimen
karomi-su > karomen

nasa (8)

50-100-100
100-100-100

Karo+mi+su > Karomen

するのは此の場合が最も多いのであります。其の中「轉す」「案す」「歎す」「感ず」の如く、語末に鼻音を帶びて居るもの、「講す」「通ず」「投ず」「報ず」の如く、語末を長く引くもの等は、ず行の活用に変ずることが多うございます。

3. 動詞の第二活用形と熟合したもの、「絶えす」「盡さす」「釣ります」「欲ります」等。

此の類の語は近來は大いに廢りましたが、古くは尙「動さす」「舊ります」「荒びす」「枯れす」「死にす」などの如きものがありまして、比較的自由に作られて居たやうであります。

4. 形容詞の副詞として用ゐられる形の「く」と「す」と熟合したもの、又は其の音便、「高くす」「高うす」「全くす」「全うす」「空しくす」「空しうす」「久しくす」「久しうす」等。此の類の動詞を、形容詞と「す」との二つに分解すべきもののやうに思つて居る人もありますが、其のさうでないことは、「枕を高くす」「手を空しうす」の「枕」「手」が「高くす」「空しうす」の目的であつて、「す」の目的でないのを見ても分ることと信じます。

5. 形容詞の語幹に「み」の附いたものと「す」と熟合したもの又は其の音便、「よみす」「なみす」「重んず」「輕んず」「賤しんず」等。此の類の動詞で「み」「が」「ん」にな

muttotu > men

arata + ni + zu
tenu mabirakata + ni + zu
saki + ni + zu > sakin zu
soratni zu > soramen

口語の「する」
の他の語と熟
合する場合

らぬのは甚だ稀で、んになつたものはザ行の活用に轉じます。併し古くは「難みす」「惡しみす」「うれはしみす」等、稍多くの用例があります。

6. にの語尾を有する副詞と「す」と熟合したもの、又は其の音便になつたもの、「新にす」「審かにす」「明かにす」「先んず」「諸んず」等。此の類の動詞で「に」が「ん」になつたものは概ねザ行の活用に轉じます。

以上六つの外に中古文などでは未來を表す助動詞の「む」の下に助詞の「と」が附き、更に「すが附いたものがず」に約つて、單に未來を表すものがあります。例へば

足の向きたる方へいなんず。|| さる所へ罷らんずるもいみじくも侍らず。

の如きもので、今日山梨静岡愛知等の諸縣に於きまして「書かう」と云ふのを「書かあず」「書かあ」「書かず」などと申しますのは此の脈であります。斯の如く文語に於きましては、種々の實質的觀念を有する詞に「すが附いて、多數の動詞を作るのであります。此の點に於ては口語も略同様であります。けれども文語ではそれが悉く佐變に活用する法則を作つて居るの

語尾が plosive = 終止音
 long + tua
 nasal 終止音

} 上 終止音

の等は何れも佐變に活用します。重^レんじる、輕^レんじる、安^レんじる、疎^レんじるの如く形容詞の語幹に「み」の附いたものとす。の熟合したものの音便は概ねず行上一段に活用しますが、[△]字の漢語は佐變に活用するもの、上一段に活用するもの、四段に活用するもの種々雜多でありまして、殆んど其の所屬を定めるに迷ふのであります。即ち「課」「解」「評」「窮」其の他多くの漢語は佐變に屬しますが、「察」「熟」「高」「焙」「通」「封」「案」「感」「談」「判」「煎」「損」等は上一段に屬し、「賀」「謝」「議」「辭」「解」「愛」「害」「廢」「弑」「託」「駁」「譯」「略」「祝」等は四段に屬しまして、殆んど何う云ふものが何うと云ふ定りがありませぬ。ただ上一段に轉じるものは語末の促るもの、延びるもの、鼻音になるものに多いと云ふことは云へますので、國定讀本にも「乗船の望に應^レじる」と、應^レを上一段に用ゐてあります。要するに一字の漢語の動詞になるに就いてはまだ一定の規則を作つて居りませぬ。加之東國地方にては斯くの如く三種の活用に分れますが、中國、四國の所々及び九州の大部に於きましては、尙佐變に用ゐ、又は四段と左變とを混じて居るので、すから、今はまだ過渡の時代に在るものと云つて宜しいことと考へます。

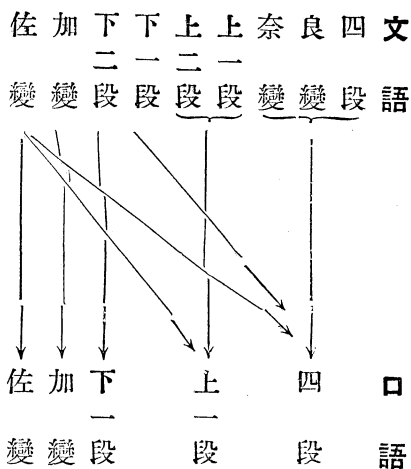
例に依りまして佐變の活用表を掲げます。

活用表

口語と文語と
活用の種類の
對照

		種類	文						口						
		行	語						語						
變	佐	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第五活用形	第六活用形	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形	第五活用形	第六活用形
ざ	ざ	(爲)	ぜ	し	ず	する	すれ	せ	(爲)	せし	し	する	する	すれ	せ
かう(講)	ぜ		じ	ず	ずる	ずれ	ぜ								

これで大體動詞の種類に關するお話は終へました。そこで全體の總括として文語と口語との活用の種類を對照して見ますと、かうなるのであります。



第二節 活用の用法及び其の名稱

動詞の活用の種類に就いては前節に於て大略を申し上げましたが、何の爲に斯く活用するのであるかと申しますれば、他の言又は辭等が連續致しまして、其の作用を全うする爲であるのであります。これから各種の動詞の活用形の用法の著しいものをお話して、それに一々名稱を與へて見ようと思ひます。

否定形

(一) 第一活用形は文語では「ず」、口語では「ぬ」または「ない」と云ふ助動詞が附いて、否定を表す形であります。これは前に活用形を調べる所で一々例を擧げてお話ししました。此の形を否定形（いひ）と云ひます。

(未然形)

文語の否定形は助詞の「ば」が附くときには、まだ成り立たない條件を假定致します。例へば

四 段―風吹かば花散らむ。

良 變―命あらば又も會はむ。

奈 變―われ死なば誰か泣くべし。

連用形

上一段―潮干ば貝を拾はむ。

上二段―綻びば縫へ。

下一段―蹴ば揚らむ。

下二段―當てば與へむ。

加 變―友來ば共に遊ばむ。

佐 變―注意せば過なかるべし。

の類てあります。之を否定形から離して特に未然形とも云ひます。

(二) 第二活用形は他の用言に連なつて熟語の用言を作る形であります。

文 語

四 段―降り出づ。

良 變―有り難し。

奈 變―死に絶ゆ。

上一段―着苦し。

上二段―閉ぢ籠る。

下一段―蹴散らす。

口 語

四 段 有り難い。降り出す。

死に絶える。

着かしい。

閉ぢ籠る。

下一段
.....

下二段―解け難し。

加 變―來馴る。

佐 變―爲遂ぐ。

解けにくい。

加 變―來馴れる。

佐 變―爲遂げる。

之を連用形と云ひます。

(名詞形)

連用形は又夫自身又は他の語と熟合致しまして、名詞に轉じることがあ

ります。例へば「光」文語口語の四段「霞」文語口語の四段「戀」文語の上二段「帶」口語の上二段「連」文語の上二段「誠」口語の下一段等は夫自

身が名詞に轉じたのでありまして、「鵜飼」文語口語の四段「立聞」文語口語の四段「犬死」口語の四段「飢死」文語の四段「袴

着」文語口語の上二段「立居」文語口語の上二段「物怖」口語の上二段「早起」口語の上二段「脊比」文語の下一段「掃溜」口語の下一段「往來」文語口語の加變等

は他の語と熟合して名詞に轉じたのであります。此の中で夫自身が名詞

に轉じまするのは、昔は比較的自由に作られたやうでありますが、今は其の

用法が甚だ狭くなりまして既に名詞化したものの外に、新に作られるもの

は、至つて少いやうであります。

(中止形)

以上二つの用法は動詞の文法上の職分と云はんよりは、寧ろ語の構成に

屬するものであります。が、連用形は此の外に語句を結び果てないで、暫く言

ひ止して下の語句に連ねるに用ゐることがあります。例へば「鳥は歌ひ蝶

は舞ふ。風も和ぎ、雨も晴れた。などは夫であります。之を連用形から離して特に中止形と申します。中止形は文語及び記録體の口語には普通に用ゐられますけれども、對話體の口語には殆んど用ゐられずして、多くは、鳥は歌ふし、蝶は舞ふ、風も和げば雨も晴れた。などの如く他の表彰法を取るのです。

(分詞形)

連用形は又動詞の^めばを續けまして、半ば名詞の如く、半ば動詞の如く用ゐられることがあります。例へば「死^めに行く」「魚を釣りに来る」の「死に」「釣り」の如き類で、後の例のやうに目的を取る所は動詞と同じでありますが、「に」を續ける所は名詞と同じであります。即ち職能から見れば動詞のやうで、形態から見れば名詞のやうなものであるのです。

終止形

(三) 第三活用形は語句を言ひ切る形であります。之は前に活用形を調べた所で例を擧げてお話ししましたから、更に例を擧げるまでもありますまい。此の形を終止形と云ひます。

動詞が名詞に轉じるのは、多く連用形からするのでありますが、間々終止形からするものもあります。例へば「かげろふ(陽炎)」「しづく(雫)」「すまふ(角力)」し

のぶ(忍草)の如きものであります。人名には殊に多うございます。例へば「順」融「競」渡「光」の如きものであります。而も斯う名詞になりますのは四段の動詞に限るのであります。

(四) 第四活用形は下に來る體言を限定する形であります。例へば、

文 語

四 段―朝鮮に行く友。

良 變―此所に在る本。

奈 變―水に溺れて死ぬる者。

上 一段―將軍の率ゐる兵卒。

上 二段―腰に帶ぶる刀。

下 一段―君が蹴る鞠。

下 二段―怪物の現れる森。

加 變―日毎に鳥の來る枝。

佐 變―彼の之を主張する理。

此の形を連體形と云ひます。

口 語

朝鮮に行く友。

四 段 此所に在る本。

水に溺れて死ぬる者。

上 一段 將軍の率ゐる兵卒。

上 二段 腰に帶ぶる刀。

下 一段 怪物の現れる森。

加 變―毎日鳥の來る枝。

佐 變―あれが之を主張する譯。

連體形の四つの場合

連體形は斯の如く下の體言を限定する形でありますが、仔細に調べて見ますると、之に四つばかりの區別があります。即ち(一)前に挙げました例の中で、「朝鮮に行く友」此所に在る「本」などは朝鮮に行くのは友であり、此所に在るのは本であつて、動詞の敘述する主體即ち主語を限定して居りますし、(二)將軍の率ゐる兵卒、腰に帶ぶる刀は將軍が兵卒を率ゐ、腰に刀を帶びるのであつて、動詞の表す動作の目的物を限定するのでありますし、(三)怪物の現る「森」日毎に鳥の來る「枝」は怪物が森に現れ、鳥が枝に來るので、動詞の表す動作の補充になるもの、又は修飾になるものを限定するのでありますし、(四)彼の之を主張する所以などは動詞の表す動作には關係のない他の體言を限定するのであります。斯う云ふやうに同じく連體形と申しましても四つの區別があるのであります。

連體形と名詞との熟合

連體形の動詞の中には久しい慣用の結果、下の名詞と共に一つの熟語を作つて居るものがあります。例へば「垂木(榎)鳴神(釣)盆(這)子」等はそれであり、之も四段活用 of 動詞に限るのであります。

連體形と體言との間に「の」

文語の連體形の動詞は下の體言に接する場合に「花を見るの」記「國を富ま

を介む慣例

準體

既然形

す。術の如く、問々助詞の「の」を介して接することがあります。其の用例は既に中古の漢文の訓點にも澤山にあります。物語類にも時に見えて居ます。思ふに之は漢文を訓ずる上に「入徳之門」などの如く用ゐた「之」を落さずに訓じたのが「之」の字のない場合にも移り、やがて國文にも這入つたものであらうと思はれます。處が普通の文典には中古の國文に用例の少ない爲か之を誤謬だとして居ます。けれども既に中古に於て、漢文の訓點又は漢文の訓點から來た公用文には殆んど常格の如くになつて居ります。徳川時代に至りましては益々廣く用ゐられることになつて居りまして、助詞の「の」の有無に依つて上の語句にも輕重があるのですから、例の「文法上許容すべき事項」の中に之を加へることになつて居るのであります。

文語の連體形は屢々名詞に準じて用ゐられます。「歸る」を忘る。「起くる」も「歸る」などは其の例であります。口語では此の場合に助詞の「の」を伴ひます。「歸る」の「の」を忘れる。「起さる」のも大儀。「のやうに」。此の事は尙後に至つて詳しくお話しする機會があらうと思ひます。

(五) 文語の第五活用形は助詞の「ば」が附いて、(イ) 既に成立した條件を表し、又

は(ロ)條件の成立したものととして假定するに用ゐます。例へば

四 段 風吹けば今日も船を出さず。(イ)

虎嘯けば風起る。(ロ)

良 變 我とて目あれば見ゆるなり。(イ)

徳あれば人服す。(ロ)

奈 變 人の去ぬれば我も去ぬるなり。(イ)

父死ぬれば子代る。(ロ)

上 一段 人の見れば羞ぢて書かぬなり。(イ)

綿入を着れば暖かなり。(ロ)

上 二段 行列の過ぐればにや人々大路に満ちたり。(イ)

麒麟も老ゆれば驚馬に劣る。(ロ)

下 一段 放馬暴れまはりて蹴れば人々あわてまどふ。(イ)

蹴れば倒る。(ロ)

下 二段 敵を追手に支ふれば退いて搦手に押寄す。(イ)

後るれば人に制せらる。(ロ)

加 變

珍客の來ればとて置物おき、掛物かけなどす。(イ)
春來れば花咲く。(ロ)

佐 變

彼の成績の優れたるは、平素善く勉強すればなり。(イ)
運動すれば食欲増進す。(ロ)

此の形を「已然形」と云ひます。

口語の第五活用形は助詞の「ば」が附いて、(イ)まだ成立しない條件を假定し、又は(ロ)既に條件の成立したものととして假定する形であります。例へば

四 段

風が吹けば花が散らう。(イ)
虎が嘯けば風が起る。(ロ)

上 一 段

潮が干れば貝を拾はう。(イ)
綿入を着れば暖だ。(ロ)

下 一 段

當てれば遣らう。(イ)
後れれば人に制せられる。(ロ)

加 變

友達が來れば一所に遊ばう。(イ)
春が來れば花が咲く。(ロ)

假定形と未然形・既然形との比較

佐 變 注意すれば過はなからう。(イ)
運動すれば食欲が進む。(ロ)

此の形を假定形と申します。

假定形は文語の未然形と既然形とを兼ねて居まして、前の例の(イ)は未然形の場合と同じく、(ロ)は既然形の(ロ)の場合と同じであります。尙詳しく申しますれば、助詞の「が」附いて條件を表す形には(イ)未だ成立しない條件を示すもの、(ロ)既に成立した條件を示すもの、(ハ)既に條件の成立したものとして假定するものの三つの場合がありますが、それに就いて文語・口語を調べて見ますと、

(イ)	文語 — 第一活用形 — 未然形
	口語 — 第五活用形 — 假定形
(ロ)	文語 — 第五活用形 — 既然形
	口語 — ……
(ハ)	文語 — 第五活用形 — 既然形
	口語 — 第五活用形 — 假定形

と云ふことになつて、口語では文語の既然形の一用法を缺いて居ることになるのであります。併し若し假定形の下に「ば」と共に助詞の「こそ」が來ますと、既に成立した條件を示すに用ゐます。例へば「君の爲を思へばこそ忠告するのだ。」勉強すればこそ善く出来るのだ。などの如きものであります。即ち此の場合を加へますと、口語の假定形は文語の未然形及び既然形の全部の用法を兼ねるとも云ふことが出来るのであります。

口語の動詞の普通の假定には「風が吹いたら花が散らう虎が嘯くと風が起る」の如く尙他の表彰法があります。何れ助動詞・助詞の所で改めてお話しする積りであります。

(六) 文語の四段良變・奈變の動詞の第六活用形及び其の他の動詞の第六活用形に助詞の「よ」の添つたもの、口語の四段の第六活用形及び其の他の動詞の第六活用形に「ろ」又は「よ」「い」の添つたものは命令を表す形であります。其の例は前に擧げてお話ししました。此の形を命令形と云ひます。丁寧な命令の表彰法及び命令形の下に附く助詞に就いては尙後にお話し致します。

總括表

文語の四段良變等は助詞の「よ」が添はないで其の儘で命令を表すのが普通でありますけれども、間々「文はよも見給はじ」とばにて申せよ。あはれとだにおぼしおけよ。さりとてあこは我が子にてあれよ。等のやうな古例がありますし、下二段佐變等は助詞の「よ」が添つて命令を表すのが普通でありますけれども、往々「箏心に入りたりとて之に習はせ」と北の方のたまへば……「富士の根のならぬ思に燃えは燃え」しだり柳の蘗せ吾妹「事計よくせ」吾背子等のやうな古例があります。殊に加變は中古に於ては「其の子こち率てこ」たしかに問ひ奉りてこ。などと常に「よ」が添はなかつたやうであります。

これで活用形の用法の大體をお話ししましたが、茲に一言御注意を乞ひたいと思ひますのは、以上述べた所は各活用形の著明なる用法を述べ、それに名目を與へて、それで以て其の形を代表させようと云ふ方便に過ぎないので、決して其の形の全體の用法を盡したのではないと云ふことであります。例へば否定形は單に否定し、又は假定するに用ゐるばかりでなく、「行か
る」「行かれる」「起さる」「起きられる」「の如く」「るる」「らるる」が附いて受身を

表し、行かす、行かせる、起きさす、起きさせるの如く「すせる」「さすさせる」が附いて使役を表し、行かむ、行かう、起きむ、起きようの如く「むうよう」が附いて未來を表すなど、他の種々の場合に用ゐられるのであります。けれども其の場合を盡して之に名を附けることは殆んど繁に堪へない所で、説明の不便を増すばかりでございしますから、他の用法は別の場合に譲つて、斯の如く著明な用法を挙げ、それに名を附けて、それで以て其の形を代表させることにしたのであります。即ち、行かる、行かれる、起きさす、起きさせるの如く用ゐた「行か」「起き」も「行かず」「行かぬ」「起きさず」「起きない」と用ゐた「行か」「起き」と同じく否定形と云はうとするので、其の名の起つた所から考へれば、如何にも可笑しうございしますけれども、活用形に具體的の符牒を與へたものと考へれば、別に可笑いこともないのであります。御注意までに一寸申添へておきます。

今左に活用形の名稱を文語の九種、口語の五種の活用に配當して御覽に入れませう。

文								語			
種類	語幹	否定形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形				
四段	か(書)	か	き	く	く	け	け	種類	語幹	否定形	連用形
良變	あ(有)	ら	り	り	る	れ	れ	四	あ(有)	ら	り
奈變	し(死)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	段	し(死)	な	に
上一段	き(着)	き	きる	きる	きる	きれ	き	上一段	き(着)	き	きる
上二段	お(起)	さ	さ	く	くる	くれ	き		お(起)		
下一段	け(蹴)	け	ける	ける	ける	けれ	け				
下二段	う(受)	け	け	く	くる	くれ	け	下一段	う(受)		
加變	こ(來)	こ	くる	くる	くる	くれ	こ	加變	こ(來)	こ	くる
佐變	せ(爲)	せ	する	する	する	すれ	せ	佐變	せ(爲)	し	し

口								語			
種類	語幹	否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形				
四段	か(書)	か	き	く	く	け	け	種類	語幹	否定形	連用形
良變	あ(有)	ら	り	り	る	れ	れ	四	あ(有)	ら	り
奈變	し(死)	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ	段	し(死)	な	に
上一段	き(着)	き	きる	きる	きる	きれ	き	上一段	き(着)	き	きる
上二段	お(起)								お(起)		
下一段											
下二段	う(受)							下一段	う(受)		
加變	こ(來)	こ	くる	くる	くる	くれ	こ	加變	こ(來)	こ	くる
佐變	せ(爲)	し	し	する	する	すれ	せ	佐變	せ(爲)	し	し

第三節 活用形の音便

動詞の活用形の音便は上古には殆んど見えないのでありますが、奈良朝の末頃からぼつ／＼見え初め、平安朝に至つて漸く盛になり、遂に今日に至

kiki+te, kiki+de
aogi+te > aogi+de

stimme が た-ア-ア
du 1+1

カ行・ガ行の
音便

つたのであります。總べて音便は口の無性から起るのであります。平安朝に至つて殊に盛になりましたのは、此の時代一體の風潮として口調の雅馴なのを喜び、拮屈なのを避けたのに由ることもありませうし、又本居翁の申して居られる如く、漸く漢語の音に馴れて來た影響もあらうと思はれます。此の音便をカ行ガ行の音便、サ行の音便、ハ行の音便、ナ行バ行マ行の音便、タ行ラ行の音便の五つに分けてお話し致します。

(一) カ行ガ行の音便は其の行に活用する四段の動詞の連用形の「き」「ぎ」が子音を脱落するのであります。例へば

文 語

一を聞いて十を知る。

仰いで天に愧ぢず。

口 語

泣いて歸つた。

小刀を磨いて木を切る。

やつと仕事が片附いた。

風が和いだ。

中古には「古めいたる」「歎いたまふ」等の如く、此の音便が稍、廣く起つたのでありますが、今日では文語に於ては助詞の「て」を連ねる時、口語に於ては助詞

のて助動詞の「た」を連ねる時に起るのであります。ガ行四段の連用形に「て」又は「た」が連るときには、濁音に轉じるのが常であります。

「行く」と云ふ動詞はカ行四段の活用でありますけれども、口語では「行つて」「行つた」のやうに促音になります。

サ行の音便

(二) サ行の音便は其の行に活用する四段の動詞の連用形の「し」が子音を脱落するのであります。中古には「臥いたまふ」「おほしまいし」「おぼしめいて」の

如く廣く行はれて居たのであります。今日の普通文には之を用ゐませぬ。口語では愛知・岐阜・福井・石川・富山・岡山・鳥取・島根・福岡筑後を除く大分其の他の所

に於ては「て」又は「た」が附く時に「指いて」「出いて」「落いて」「殘いて」「離いて」「流いて」「崩いた」「暮いた」「殺いた」「潰いた」「延ノビいた」等の如く「ふ」と云ひ、又「い」を「え」と云ひます。併しそれもサ行四段の少數の動詞に限つて起るのであります。一般の規則とするに足りませぬ。原音の「し」に一定したいと思ひます。

ハ行の音便

(三) ハ行の音便は其の行に活用する四段の動詞の連用形の「ひ」が子音を脱落し、更にそれが「う」又は促音に轉じるのであります。此の「う」に轉じるものは古くは「のたまうける」「打すてたまうつ」「思おもう給たまうける」の如く最も廣く行は

shu> i

hiy is n

仮名遣ニル
えん注

れたのでありますが今は促音に轉じるものと同じく、文語では「て」、口語では「て」に連なる場合に起るのであります。例へば

文 語

舟を戯うて川を下る。

誓つて此の恥を雪がむ。

口 語

酒を買うて來る。

途で伯父さんに遇うた。

シャツを洗つて下さい。

これですつかり揃つた。

口語ではハ行四段の連用形の「ひ」が「う」になるのと、促音になるのとは東西に依つて分れて居まして、富山・石川・福井・滋賀・三重の東境から西は「う」に申しますし、東は促音に申します。國定讀本は主として東京語に則つてありますから、専ら促音の方が用ゐてありますが、「う」の方も行はれて居る範圍は廣し、舊來の文學の上にも土臺があるのですから、必ずしも之を捨てるに及ばぬと考へます。

それから茲で一寸假名遣の上の御注意を申し上げて置きますが、今日世の人はハ行四段の「う」の音便を「歌ふて」「思ふて」「争ふて」の如く「ふ」に書きます。

ナ行・バ行・マ行の音便

これは其の語の終止形が「ふ」だから、それと思ひ紛つて書くのでせうが、「う」は固よりの活用形ではなくて、連用形の「ひ」が之に轉じるのですから「ふ」と書いてはならぬのであります。

(四) ナ行・バ行・マ行の音便は文語の奈變即ち口語のナ行四段とバ行・マ行四段との連用形の「に」「び」又は「み」の母韻が落ちて、撥ねる音に轉じるのであります。文語では「て」、口語では「た」に連なる時に起ります。さうして其の時は常に濁音になるのであります。例へば

文語

死にんで吾が罪を贖はむ。

暫し忍にんで吾が言ふ所を聞け。

夕には月を踏みんで歸る。

口語

死にんでは花が咲かぬ。

念佛を唱へながら死にんだ。

聞えるか呼をんで御覽。

崖から飛にんだ。

酒を飲みんで酔ひ潰れる。

留守を隣の人に頼にんだ。

山口・高知・九州の大部及び其の他の所々では、バ行・マ行四段の連用形の「び」

ni
bi
mi

n
m
m

便六平安齋ニ
関 予信之
お和之云テ
ニ此方面ノ

云ひます。文語では「て」、口語では「て」を接するとき起ること、前の諸音便と同じであります。例へば

口語

立つてお読みなさい。

取つて上げませうか。

兜の星に中つた。

以上種々の音便の中で促る音便と撥ねる音便とは平安朝の始にはなかつたもので、其の末頃からだん／＼と文學の上に顯れて居ります。然らば此等の音便が平安朝の末に始めて起つたかと云へば恐らくさうではなくて、

提音便 捺音便
 半力半印コハナ 閑 子依之ノ
 車也司士執力方 お和ニシラ
 ノ口心スヤユ
 一 妙 病
 二 此ノ本曲

平安朝時代に於きまして、東國地方に於きましては之が存在して居たに相違なからうと思ひます。唯京都の標準語には存在して居なかつた爲に、文學の上に顯れなかつたのであります。處が藤原氏が衰へて、之まで東國地方に居た武士が追々と京都に入り込むやうになりました、其の地方の方言が京都の標準語にも混ざる様になり、随つて促る音便、撥ねる音便が文學の上にも顯れることになつたのであらうと思ひます。殊に文治六年に鎌倉幕府が建設されて、政權が全く東國の武士に落ちるやうになりました。からは、言語の上に大變動が起きたに相違ないので、同じ京都の人の書いた文學の上にも、其の影響は明かに認めることが出来るのであります。例へば「行音便の所で、う」の音便と促る音便とが東西に依つて分れて居ると云ふことを申しましたが、之は明かに此の關係を語つて居るので、西國では京都言葉の脈を引いて「う」の音便を用ゐ、東國では關東言葉の脈を引いて促る音便を用ゐて居るのであります。

第四節 自 他

山田氏 清義 三五

形式
性質

他動詞
自動詞

自動詞

完全自動詞
不完全自動詞

補語

動詞を形式に依つて分つ時に、文語では九種、口語では五種になることは既に話し致しましたが、之を性質に依つて分けるときには自動詞他動詞の二つになります。

動詞が其の表す動作を受ける物事を表す體言を要せず、夫自身で動作者即ち主語の敘述を全うし得るときには之を自動詞と云ひます。例へば「雨降る」「鳥が飛ぶ」の「降る」「飛ぶ」が夫自身で其の動作者なる「雨」「鳥」の敘述を全うするから自動詞である類であります。

けれども自動詞は「降る」「飛ぶ」の如く夫自身で主語の敘述を全うするものばかりではありませぬ。中には動作を受ける物事を表す體言は要しないけれども、動作の係る物事を表す體言を補はないでは、敘述を全うする事の出来ないものがあります。「月松の樹に懸る」「子が親に代る」の「懸る」「代る」が其の動作のかゝる「松の樹」「親」を補つて動作者の「月」「子」に對する敘述を全うする類であります。斯の如きものを不完全自動詞と云ひ、不完全自動詞に對して「降る」「飛ぶ」の如きものを完全自動詞と云ひます。又「松の樹」「親」の如く不完全自動詞の表す動作の係る物事を表す體言を不完全自動詞の補語と云ひ

他動詞

ます。

客語

完全他動詞
不完全他動詞

✓次に動詞が其の表す動作を受ける物事を表す體言と共に、動作者即ち主語の敘述を全うしまする時には之を他動詞と云ひます。「風花を散す」「主人が客を招く」の「散す」「招く」が其の動作を受ける物事「花」「客」と共に、動作者たる「風」「主人」に對する敘述を全う致しまするから他動詞である類てあります。「花」「客」の如く動作を受ける物事を表す體言は之を客語と云ひます。

他動詞には客語ばかりでは主語の敘述を全うすることが出來ないで、更に其の動作の係る物事を表す體言を補つて、始めて之を完うするものがあります。「山影を水に映す」「姉が妹に琴を教へる」の「映す」「教へる」が客語の「影」「琴」の外に其の動作のかゝる「水」「妹」を補つて、始めて動作者即ち主語たる「山」「姉」の敘述を全うする類てあります。斯の如きものを不完全他動詞と名づけ、不完全他動詞に對して「散す」「招く」の如きものを完全他動詞と云ひます。又「水」「妹」の如く不完全他動詞の表す動作の係る物事を示す體言を不完全他動詞の補語と云ひます。

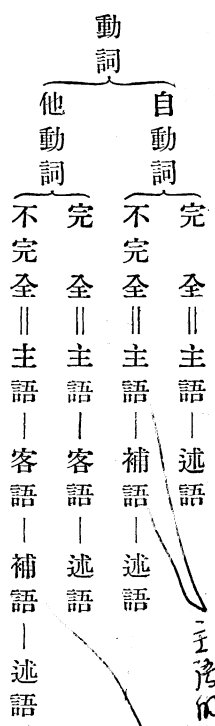
以上申し上げました所を總括致しますると、かう云ふことになります。

他 自

主語的補語
客語的補語

變易動詞

自他の對偶



主語的補語

客語的補語

變易動詞

不完全自動詞の補語の中には主語の表す物事と契合する物事を表すものがあります。「花雪に紛ふ」の「雪」が主語を表す物事たる「花」に準じられた物を表し、「炭が灰になる」の「灰」が主語を表す物事たる「炭」の變じた物を表す類であります。斯の如きものを主語的補語と云ひます。又不完全他動詞の補語の中には客語と契合する物事を表すものがあります。「身を農夫に侑す」の「農夫」が客語を表す物事たる「身」になぞらへたものを表し、「砂を玉にする」の「玉」が客語を表す物事たる「砂」の變じたものを表す類であります。かくの如きものを客語的補語と云ひます。さうして主語的補語又は客語的補語を要する動詞を變易動詞と云ふのであります。

動詞には自動詞・他動詞で對偶を成して居るものがあります。對偶を成して居るものの中には活用の行を同じくして居るものもありますし、之を

異にして居るものもあります。又其の各にも活用を同じくするものと異にするものとの別があります。例へば「花開く」^(段四)「窓を開く」^(段四)「夜が明ける」^(段下二)「戸を明ける」^(段下二)の如きは活用の行を同じくして活用を同じくする者、船港に入る^(段四)「玉を匣に入る」^(段下二)「紙が裂ける」^(段下二)「絹を裂く」^(段四)の如きは活用の行を同じくして活用を異にする者で、「星移る」^(段四)「居を移す」^(段四)「八方が塞がる」^(段四)「穴を塞ぐ」^(段四)の如きは活用の行を異にして活用を同じくするもの、「勝敗定まる」^(段四)「期日を定む」^(段下二)「血統が絶える」^(段下二)「根を絶やす」^(段四)の如きは活用の行を異にして且つ活用を異にするものであります。しかし動詞は其の皆が對偶を成して居るのではありません、自動詞ばかりで其の對偶のないのもあり、他動詞ばかりで其の對偶のないのもあります。例へば「咲く」「歩む」に他動詞がなく、「飲む」「食ふ」に自動詞のない類であります。

第五節 敬讓動詞

動詞が尊敬の意を表し、又は卑下の意を表すには多くは助動詞を伴ふの

文語の崇敬動詞

でありますが、又獨立に尊敬の意を表し、又は卑下の意を表すものがあります。尊敬の意を表すものを崇敬動詞と云ひ、卑下の意を表すものを謙讓動詞と云ひ、總稱しては敬讓動詞と申します。

文語の崇敬動詞の主なものとは次の表の通りであります。

崇敬動詞

あそばす(す)

四段

います(行く・來り)

四段

おはしますおまします(在り・居り)

四段

おはす(行く・來り)

下二段

おもほすおほすおほしめす(思ふ)

四段

おほす(云ふ)

下二段

きこす(聞く)

四段

きこしめす(聞く・食ふ)

四段

ごらんず(見る)

佐變

しろすしろしめす(知る)

四段

活用の種類

grate + ram, grate + ram, grate + ram

口語の崇敬動詞

ます・まします (在り)

四 段

まゐる (食ふ・飲む)

四 段

みそなはす (見る)

四 段

たまふ (與ふ)

四 段

たまはる (呉る)

四 段

のるのたまふ (言ふ)

四 段

めす (呼ぶ・着る・食ふ・飲む)

四 段

右の中には古語も交つて居ますが、近代語には尊敬の意を表すものが乏しい爲に、普通文でも特に尊敬の意を示す必要のある場合には、多くの古語を交へることになつて居ますから、其の主なものを挙げたのであります。後に云ふ文語の謙讓動詞の場合も同様であります。

文語の「入る」と云ふ動詞は夫自身には尊敬の意は御座いませんが、それに助動詞の「す」と「らる」とを連ねて「入らせらる」と申しますと、「おはす」と同じ意味を表します。これは口語の「入らつしやる」の語原であります。

口語の崇敬動詞の主なものは次の表の通であります。

崇敬動詞

あがるめしあがる(食ふ・飲む)

あそばす(する)

いらつしやる(居る・来る・行く)

おつしやる(言ふ)

おぼしめす(思ふ)

くださる(くれ・る)

なさる(する)

めす(呼ぶ・着る・乗る・穿く・買ふ等)

右の中で同じく「食ふ」「飲む」と云ふ意を表す「あがる」と「めしあがる」とでは「めしあがる」の方がより多く丁寧であり、同じく「する」と云ふ意を表す「なさる」と「あそばす」とでは「あそばす」の方がより多く丁寧なのであります。

口語の崇敬動詞には右の表に掲げたものの外に「寝る」の意の「およる」(段四)、「起きる」の意の「おひんなる」(段四)、「居る・来る」の意の「ござる」(段四)、「見る」の意の「御覧じ(段上)」「来る」の意の「見える」(段下)」などがありますけれども、普通ではありませ

活用の種類

四 段

四 段

四* 段

四* 段

四 段

四* 段

四* 段

四 段

複合せる崇敬
動詞

ぬ。又「居る・來る・行く」の意の「おいでなさる」「あそばす」になる。「來る」の意の「あこしなさる」「あそばす」になる。「歩く」の意の「おひろひなさる」「あそばす」になる。「死ぬ」の意の「おかくれなさる」「あそばす」になる。「見る」の意の「御覽なさる」「あそばす」になる。「許せ」の意の「御免なさい」「あそばせ」杯の如く、「なさる」「あそばす」になるを伴つて尊敬の意を表すものもあります。併し「おいで」「あこし」「おひろひ」「おかくれ」は名詞として用ゐる、御覽又は御免は名詞又は命令の動作に用ゐることがあります。

口語の崇敬動詞の中で、「いらつしやる」「おつしやる」「くださる」「なさる」は良行四段に活用致しまするが、其の連用形の「り」の使用の範圍が狭く、且つ之に助動詞の「ます」が連なります時には、子音が脱落して「い」になることが多くございます。又命令には「れ」を用ゐずして、此の「い」の形を用ゐるのが普通であります。即ち左表の通てあります。

「いらつしやる」
「おつしやる」
「くださる」な
さる」の活用

語	幹	否定形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
いらつしや	おつしや		り(さう)				

くださ
な
な

ら

い
(ます)

る

る

れ

い

東京地方では「いらつしやる」に「て」が附くときに「いらつしやつ」^{〔た〕}と云はないで、「いらつしつ」^{〔た〕}と云ひ「なさる」^{〔た〕}「くださる」^{〔た〕}に「て」が附くときに「なさつ」^{〔た〕}「くださつ」^{〔た〕}と云はないで「なすつ」^{〔た〕}「くだすつ」^{〔た〕}と云ひます。いくら東京語でも之は直さなければなりませぬ。

尙地方に依りましては「くださる」^{〔た〕}「なさる」^{〔た〕}を下一段に活用させ、又は四段と下一段とを混合して居ります。下一段に云ふのは「くだす」^{〔た〕}「なす」^{〔た〕}に助動詞の「れる」が附いた「くだされる」^{〔た〕}「なされる」^{〔た〕}が残つて居るので「なさる」^{〔た〕}「くださる」^{〔た〕}の語原なのであります。

文語の謙讓動詞

謙讓動詞

文語の謙讓動詞の主なものは左の通りであります。

活用の種類

うけたまはる^{〔聞く〕}

四段

きこゆ^{〔云ふ〕}

下二段

口語の謙讓動詞

さぶらふ (在り)
居り

たぶ (食む)
飲む

たうぶ (食む)
飲む

たてまつる (與ふ)
與ふ

つかまつる つかうまつる (す)
する

まうす (云ふ)
云ふ

まかる (行く)
退出す

まゐる (行く)
來る

まゐらす (與ふ)
與ふ

はべり (在り)
居り

次に口語の謙讓動詞の主なものとは左の通であります。

謙讓動詞

あがる (訪ねる)
訪ねる

あげる さしあげる (遣る)
遣る

いただく (受く・食ふ)
飲む

四 段

四 二段

下 二段

四 段

四 段

四 段

四 段

四 段

下 二段

良 變

活用の種類

四 段

下 一段

四 段

いたす(する)

四 段

うかがふ(訪ねる)

四 段

うけたまはる(聞く)

四 段

ござる(在す)

四^{*} 段

ぞんずる(知る)

佐 變

たべる(食ふ)

下 一段

つかまつる(する)

四 段

まうす(云ふ)

四 段

まうしあげる(云ふ)

下 一段

まゐる(行く)

四 段

右の中で同じ「遣る」と云ふ意味を表す「あげる」と「さしあげる」とでは「さしあげる」の方が丁寧であり「する」と云ふ意味を表す「いたす」と「つかまつる」とでは「つかまつる」の方が丁寧であつて「云ふ」と云ふ意味を表す「まうす」と「まうしあげる」とでは「まうしあげる」の方が丁寧であります。

口語の謙讓動詞には右の表に掲げたものの外に「行く」の意の「参じる」と云

ふのがあります。又「逢ふ」の意の「お目にかゝる」「見せる」の意の「御覽に入れる」「貸す」の意の「御用立てる」等の如く、連語で以て卑下の意を表すものがあります。すし「參上」「進上」「頂戴」「拜見」「拜聴」「拜借」等の如き漢語に「する」「いたす」「つかまつる」を附けて謙讓の意を表すものもあります。後の方のは間々漢語其の儘でも用ゐることがあります。

口語の謙讓動詞の中で「ござる」は多くは助動詞の「ます」を連ねる場合に用ゐます。此の場合には連用形の「り」を音便で「い」に云ふことが多いのであります。